



令和2（2020）年度「不登校を考える学習会」（第2回）を行いました。

2020.12.12(土) 小都市人権教育啓発センター

演題：不登校支援の輪を広げよう ～新型コロナウイルスと不登校～

講師：不登校生保護者の会「ぼちぼちの会」会長 木村 素也 さん



今年度の第2回不登校を考える学習会を、木村素也さんを講師に迎え、47名の参加で行うことができました。これまでに不登校を経験した多くの生徒や保護者に接してきた木村さんが感じた、臨時休校等があった今年度の不登校生やその保護者を取り巻く状況や、不登校生への学校や保護者の対応についてお話ししていただきました。

○ 臨時休校によって見えてきたこと

3～5月はほとんどの子どもたちが強制的に不登校生と同じような状況になり、SNS・動画アプリ・ゲームなど、いわゆる「スクリーンタイム」増加の調査結果もあります。昼夜逆転につながるなど、不登校であるかどうかに関わらず、どの子にも起こりうる問題であることが明らかになった期間でもありました。諸外国では登校できない子どももいることを前提にオンライン環境が整備されていたので素早い対応ができました。多様性に対する寛容を大切にして、運用する大切さを言われました。

○ 不登校の子どもたちに負担が大きい時間と少ない時間

不登校の子どもたちにとって、卒業式や修学旅行・体育祭など、「普段とちがうこと」は負担が大きい時間です（昼休みも負担が大きい）。その一方で、周囲との交流が少ない授業や講演会などの方が比較的負担が少なくなります。「行事のない日に來ることが出来る環境を大切にする」という視点を話されました。

○ 「正論」よりも困っていることに手を打つ

学校に行かないことによる不利な点など「正論」で子どもを追い詰めることが多くありますが、その「正論」は子どもはわかっていることが多いのです。それよりも「子どもが困っていることは何か」をつかみ、具体的にどんな手を打つことがいいのかに注力することの大切さを話されました。例えば、久しぶりの登校で他の生徒の目が気になるのであれば、どの入口から入って、どの時間やルートでどの教室で時間を過ごすかなど具体的な内容を子どもと話しながらか決めていくことが考えられます。大切なのは本人です。

その後、ご自身も不登校の経験があり、現在、不登校生の支援活動もされてある20代の方に、ご自身の体験や当時の心の動きなどを語っていただきました。

不登校のときにしていたこと

家でゲームやブログをしていた。ネットの世界にも入れるし、ネット上に理解者もいて楽しいこともあったが、ネット上でトラブルになることもあり、嫌だと思ったこともあった。家では将来のことなど、多くのことを考えた。

言われてつらかった言葉、楽になった言葉

自分は考えを言葉にするのが苦手だったが、自分の考えがまとまっていないのに「これからどうしたいのか？」など、答えにくい質問をされることはつらかった。

中学生の不登校の時に心のエネルギーがたまってきて、高1の1学期は休まず頑張ったが、その反動で夏休みに体調を崩し、辞めることも考えたとき「もし、あなたがここで高校を辞めても、あなたがここまで頑張ってきたことはなくなるから」と言われたときは気持ちが楽になり、結果的に3年生まで登校できた。

社会との関わりが途切れる不安

学校に行かないことを決意するまでには様々な過程があった。学校には行かなかったが、発達しようがいの検査やカウンセリングに行っていたので、社会と切れる感覚はなかった。



○ 学習会の終わりに

学習会の最後に、地域で不登校の子どもをどう支えたらいいのかという視点での質問等が出されました。不登校の子どもは学校に行けていないことを気にする子どもが多いので、(明らかに様子がおかしいときは別だが)「おはよう」などのあいさつを中心とした普通の声かけの大切さに触れられました。

○ 学習会を終えて

一旦減少に向かっていた不登校の子どもの数が、ここ数年増えてきている調査結果があります。90日以上の長期欠席も前年度より増えています。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響による生活環境の変化もあり、悩んでいる子どもや保護者も多いのではないかと思います。

そんな中、同じような状況にある方の話を聴いたり、自分の思いとつながる所を感じたりすることで、これからの展望が見えてくる部分も大きいと、今回の学習会で感じました。お互いに相談したり、支援の方法を考えたりできる関係性の構築が、解決の糸口になると思います。

講師の木村さんからは、学校の立場からも不登校生を支援する視点をいただきました。学校でも様々な支援が続けられていますが、子どもが困っていることに目を向けた具体的な支援を行っていきたいと思います。

この学習会では、保護者や子どもたちだけでなく、地域の方など、周りで支える大人の方が真摯に考えるお気持ちも感じました。この学習会が、保護者や子どもたち、そして周りで支える大人が前を向いて行動できる力になればと思います。

【参加者の声 (アンケートより)】

- 新型コロナウイルス感染症が広がる状況下での気持ちについての説明などわかりやすかったです。不登校体験者の意見もとても参考になりました。その子その子の今の気持ちを見るのが大切だと思いました。木村先生の子どもや親への思いをもっと伺いたいと思いました。
- 初めて不登校についての学習会に参加しましたが、様々な話を聴かせていただいて、少し気分が楽になりました。
- 実際の不登校の子どもたちに関わってこられた経験の中での話、体験者の方の実体験からの話を聴いて、気持ちが少し洗われたように思えます。私の心のリハビリの場・時間です。
- 初めて参加しましたが、今、自分の子どもが半分不登校状態にあり、参考になりました。体験者の方の話にも共感する部分がありました。木村先生の話は、私が悩んでいることの話もあり、また話を聴きたいなとすごく思いました。
- 不登校は一人ひとりその子によって違う。学校に行くか行かないかではなく、「学びを保障する」という視点に社会が変わっていくといいなあと思いました。子どもの話をよく聴いて、その子の話したことから具体的にどうしたらよいかを考えていけたらよいと思いました。「(行事等のときではなく)なんでもない時に(登校することを)誘う」— 大切なことだと思いました。
- 不登校がこれだけ増加している中、日本でも登校しない子への学習機会の提供を進めてほしいと思います。しょうがいがある子への教育を含め、教育方法の多様化を図っていただきたいです。不登校体験者のお話は大変役立ちました。子どもが何を考えているのか全然わからなくて困惑しているので…。
- 木村さんのお話は、すべて不登校の子どもやその保護者の視点からされていたので、これまで自分が気づいていなかったことをたくさん教えてもらいました。例えば、行事が苦手なのに、その行事に来るように促されることが多いという点や、今回の休校措置で、各家庭が感じた不安や困りごとは、不登校の子どもやその家族が感じていることと同じなのだという点です。その視点からものごとを見ていかないといけないと思いました。それと、子どもの力をもっと信じて、自分で考えて、自分で決めていけるように見守っていきたいです。